

サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り (5)

二〇一五年七月二十八日付で、日本統一教会（現、家庭連合）元会長の江利川安榮氏が「退会届」を郵送してきました。そこには、文亨進様を中心とした米国のサンクチュアリ教会の下で、日本サンクチュアリ教会総会長兼協会長として出発するとありました。

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。これらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。以下、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。

なお、誌面の都合上、文字数の制限があるため、詳しくは「真の父母様宣言文サイト (http://trueparents.jp/)」の掲載文や映像をごらんください。（教会成長研究院）

注・本文中、真の父母様のみ言は「青色」で、サンクチュアリ教会側の主張は「茶色」で色分けしています。

【7】四位基台の図で、アダムとエバの位置が逆転している問題

サンクチュアリ教会側は次のような批判をしています。

「四位基台の図を書くとき、主体であるアダムを左、エバを右に書く。ところが、現在の原理講義（成約摂理解説）では、エバを左、アダムを右に書いて

いる。これは**主管性転倒**である」

彼らはこのようにして、真のお母様が真のお父様を**主管性転倒**しようとなさっているかのよう

に印象づけようとしています。

この件について応答いたします。この件について応答いたされています。インターネットで公開されている「成約摂理解説」の講義案で用いられた図【図1】を参照）は、二〇一四年と年数が

普及することにはなかつたのです。またこの十六万訪韓セミナーは日本婦人だけを対象とした修練会であり、韓国および世界の教会員は参加していなかったことから、世界的に普及することもありませんでした。

サンクチュアリ教会側はこれらの事実を確認せずに、アダムとエバの位置が反対になっていることをもって、真のお母様が真のお父様を**主管性転倒**しようとなさっているかのよう

に印象づけようとしているのです。ところで、サンクチュアリ教会側は、アダムとエバの位置が逆転していることのみならず、アダムと天使長を丸で囲った図【図3】を参照）に対しても、「日本教会では、堕落がまず天使長とアダムの間で起こったと教育している」と言

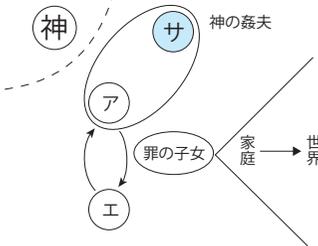
って批判しています。つまり、堕落が「同性愛」の問題だと講義しているというのです。この批判も、彼らが事実を確認せずに、かつて

な想像に基づいて行っているものにすぎません。

成約摂理解説の講義は、「原理講義」の「堕落の動機と経路」と同じであり、当然、まず天使長ルーシエルとエバの間で「霊的堕落」が起こり、次にエバとアダムの間で「肉的堕落」が起こったと説明しています。したがって、彼らの批判はいいかげんなものです。

この図は、霊的堕落をしたエバが天使長の妻（妾）の立場に立つようになり、次に、肉的堕落によってアダムを堕落させることで、堕落アダムをサタンの

図3



「成約摂理解説の講義案」に含まれている図

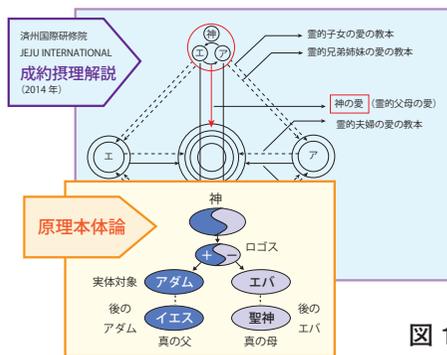


図1

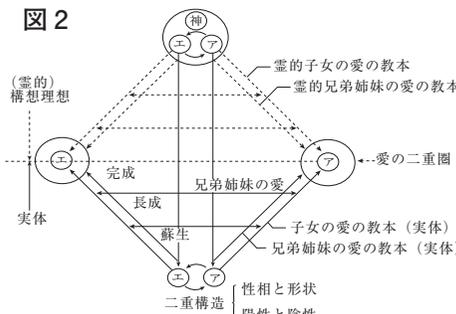
九四年に周藤健先生（四十三家庭）が、真のお父様のご指導を受けて作成していただいたものです。

この図は、お父様ご自身が書かれた板書をそのまま講義案にしたものであり、今の時代圏において登場したものではありません。二十数年前の十六万訪韓セミナー（済州島）のときに作成されたものです。お父様は、神様の方に向かってアダムが右、エバが左と説明されたとのことですが、この図は**主管性転倒**をしているというので

息子（庶子）の立場に生み変えたことを表しています。堕落エバが、アダムをサタンの息子の立場に生み変えたことについて、真のお父様は次のように語っておられます。

「堕落の責任は、サタンを中心として、エバから始まり、アダムに移りました。すなわち、偽りの生命の種を受けたエバの立場からすれば、神様に代わってサタンが父の位置でエバと一体となって、アダムを生んだ立場となり堕落がなされました。こうしてエバは、天使長とアダムを各々父と息子のような立場に立てて堕落した」（天一国経典『平和經』九〇八ページ）

【図3】（注、サタンとアダムを丸で囲んでいる部分）は、肉的堕落をすることで、堕落した天使長とアダムの間に、偽りの父子関係（参考、ヨハネ八・44）が成立し、アダムが、サタ



1996年、周藤健著『成約摂理解説』28ページ

はありませぬ。事実、一九九六年に製本された周藤健著『成約摂理解説』にはこれと同様の図が掲載されています【図2】を参照）。

ところで、従来の講義案は、神様を背にしてアダムを左、エバを右に書いていたために、神様に向かって左右の位置を逆転させると、現場が大変混乱してしまう恐れがありました。そのため、日本の現場の講師は済州島修練会で作成された講義案を採用することができず、日本で

ンの実体」という立場に立ったことを意味しています。そして、そのサタンの実体の立場である堕落アダムの汚れた種が、堕落エバの胎中に蒔かれ、サタンの血統を持った子女が繁殖するようになったというのが、この図の意味するものなのです。

ちなみに、サタンのところに「神の姦夫」と表記されていますが、この表記についても「そのような表現は初めて聞いた」と批判するサンクチュアリ教会側の方がいます。しかし、この「姦夫」という言葉は、真のお父様が語っておられるみ言です。例えば、真のお父様は平和メッセージで、「人間始祖が堕落すること」その場に現れたのは、偽りの愛、偽りの生命、偽りの血統でした。神様の愛と生命と血統が愛の怨讐である姦夫、サタンの所有権のもとに落ちてしまったのです」（『平和神經』二九〇三〇ページ）、また、別のみ言でも「サタンとは誰で

すか。神様の姦夫です」(八大

教材・教本『天聖經』一七一

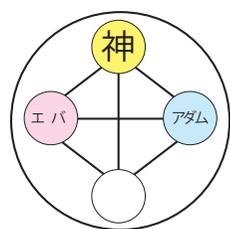
ページ)などと語っておられます。

ところで、二〇一五年に行われた「世界指導者会議」で配布された資料の一部に、アダムとエバの位置を左右に逆転させた四位基台の図が含まれていました(【図4】参照)。この図は、作業をした韓国のかたが、人為

的ミス<sup>①</sup>をすることで、原本のハンゲル(注・アダムが左、エバが右になっている)とは違って、アダムとすべきところが日本語の「アダム」となってしまったもので、その資料がサンクチュアリ教会側に伝わって騒ぎとなりました。

しかし、それはあくまでも、人為的ミス<sup>①</sup>だったのであり、済州島修練会の講義案とは関係がありません。(ただし、その作業をした韓国のかたは、もしかしたら済州島の講義案を見る機会があつて、それを参考にして

図4



2015年、世界指導者会議で配布された資料に含まれていた図

そのように逆転させてしまったのかもしれない。)

いずれにせよ、一九九三年十月から一九九四年十一月にかけて行われた十六万訪韓セミナーのときに作成された成約撰理解説の講義案は、真のお父様のご指導によって神様の方に向かってアダムを右、エバを左に逆転させて書かれていたのです。

【8】「私を教育した人は誰もいません……私が決心したので」の意味について

二〇一四年十月二十七日に、真のお母様が「私を教育した人は誰もいません。独り息子(独り子)、独り娘は同等なのです。独り息子が独り娘を教育したとは言えません。どのような意味か分かりますか?……私が決心したので」と語られたことに対して、サンクチュアリ教会側の人たちは、「真のお父様の

み言と食い違うことを語っている」と、お母様を批判します。この問題について応答いたします。確かに、真のお父様は「純真無垢な女性を、全ての女性たちの上に立てようとするのですから、先生がひとりで教育しなければなりません」(一九九四年三月二十日)、あるいは「お母様はお父様についてきます。絶対服従すれば通ずるんです。墮落したのは何かというと、エバがアダムを主管したのが墮落である。復帰されるには、アダムに完全に主管されなければなりません」(一九六七年六月十日)

「アダムを中心として女性を創造した時と同じように、天の男性を中心として女性を再創造するのです。……世界的女性完

成圏を代表した一人を中心として創造するのです。それを成し遂げてこられた方がお母様です。先生のあとにびったりとくっついてきたのです」(真の父母の

り通して、先生への信仰を持ち続けました。……これらの事情については、けっして二人の間で話し合われることはなく、『さあ、お母様、あなたはそれを理解し、勝ちぬき、不屈の忍耐で勝利しなければなりません。私はそれをこういう計画を成就するために、こういう目的に基づいてそうしたのだから。』というような説明はたった一言もありませんでした。

先生がお母様に説明し、慰めたとしたら、たとえお母様がそのために勝利したとしても、何の価値もないのです。お母様自ら意味を悟って、自分自身の理解に基づいて、忍耐し勝利しなければならぬのです。先生は、今、みなに明かしているこの程度にも、お母様に説明したことはないのです」(「祝福」一九七七年夏季号、五九〜六一ページ)

真のお父様が、「お母様自ら意味を悟って、自分自身の理解

に基づいて、忍耐し勝利しなければならぬ」と語っておられるように、あえて、教えたり、教育したりすることができない道だったので。そういう意味で、真のお母様は並々ならぬ命懸けの決意をもって、真の母としての道を歩まれ、自ら悟ってその道を開拓していかれたのです。

真のお母様が語られた「私を教育した人は誰もいません。……どのような意味か分かりませんか?……私が決心したので」というみ言は、そのような観点から語られたものであると言えます。

したがって、真のお父様が語っておられる「先生がひとり教育しなければなりません」、「復帰されるには、(エバは)アダムに完全に主管されなければならぬ」というみ言と、真のお母様が語っておられるみ言は、見詰める観点が違うというだけであつて、矛盾するものではないのです。

絶対価値と氏族的メシヤの道」(七七ページ)

「お母様は私(真のお父様)の影のようです。付いて回る影のようなので、私は実体をもった主体の教主であり、お母様は対象の教主です。それで、私は第一教主、お母様は第二教主です。何を中心としてですか。愛を中心としてそうだというのです」(同、一一六ページ)

これらのみ言に表現されているように、真のお母様は真のお父様に従って、「ぴったりとくっついて来た」(「付いて回る影のように」という絶対服従の道を歩まれながら、お父様から「第二教主」と呼ばれる位置まで勝利していかれました。そのように歩まれた道について、お父様の側から見れば、間違いなく「アダムがエバを再創造した」(「お父様がお母様を教育した」ということが言えるでしょう。

しかしながら、人類の「真の母」が歩まれる道は、絶対信仰を持つて従ったとしても、そう簡単に勝利できる道ではなかったのです。真のお父様は、真のお母様が歩まれた道について次のようにも語っておられます。

「(一九六〇年からの)七年間というものは、実に様々な非難、中傷、うわさ、誤解が、先生一家をめぐって渦まいていました。非難、中傷、迫害によって血を流す思いの期間でしたが、それらのすべてが必要なことだったので。問題は、お母様がこのような

試練に耐えて、非難されてもそれを克服し、のり越えていけるかどうかということでした。当時のお母様の立場の難しさが想像できるでしょう。そしてお母様はすべてに勝利したので。……何事が起ころうともお母様は、たえず不屈の信仰で忍耐され、犠牲になりながら沈黙を守

り通して、先生への信仰を持ち続けました。……これらの事情については、けっして二人の間で話し合われることはなく、『さあ、お母様、あなたはそれを理解し、勝ちぬき、不屈の忍耐で勝利しなければなりません。私はそれをこういう計画を成就するために、こういう目的に基づいてそうしたのだから。』というような説明はたった一言もありませんでした。

先生がお母様に説明し、慰めたとしたら、たとえお母様がそのために勝利したとしても、何の価値もないのです。お母様自ら意味を悟って、自分自身の理解に基づいて、忍耐し勝利しなければならぬのです。先生は、今、みなに明かしているこの程度にも、お母様に説明したことはないのです」(「祝福」一九七七年夏季号、五九〜六一ページ)

真のお父様が、「お母様自ら意味を悟って、自分自身の理解

に基づいて、忍耐し勝利しなければならぬ」と語っておられるように、あえて、教えたり、教育したりすることができない道だったので。そういう意味で、真のお母様は並々ならぬ命懸けの決意をもって、真の母としての道を歩まれ、自ら悟ってその道を開拓していかれたのです。